【表現学関連分野の研究動向】

日本語文法（史的研究）

山本　佐和子

今期、日本語の史的研究のうち、特に文法史関係は個人の新刊書に乏しかった。新型コロナによる研究環境への影響が遅れて現れたものと思われる。一方で、学会誌や紀要等で注目すべき特集が組まれたほか、論文集も引き続き充実していた。

目に止まったのは、歴史語用論の観点や対照研究の手法を用いて、言語変化の要因に迫る研究である。青木博史氏「語用論と日本語史研究―「評価的意味」をめぐって―」（『日本語学』41-3）は、使用される場面における意味から言語変化の要因を説明する「通時的語用論」について事例を掲げて紹介する。同氏「抄物資料による日本語史研究の展望―歴史語用論の観点から―」（『国語国文』91-11）は、国語学の抄物研究が、社会・文化との関わりから文献資料を読み解き、共時的な言語体系の詳細を明らかにする「語用論的フィロロジー」の一環であったことを指摘する。

歴史語用論を観点とする論考では、深津周太「否定的文脈に用いる「何が／何の」の史的展開」（『日本語文法』22-2）が、両形式の対話場面での意味を詳細に観察して、反語用法から否定明示の副詞用法が生じ、「何の」が否定応答表現に進出する過程を鮮やかに描く。ただし、「何が」に否定明示の副詞用法が生じているかは疑問が残る（例とされた（8b）は「何しろお濃茶のようなものは、お代わりしたいと言ったらいけませんよ」）。また、酒井雅史「対照方言学的観点からみた存在表現の歴史変化の様相」（『日本語文法史研究』6）は、『読みがたり各県のむかし話』を、「むかし話を語る」という言語生活の一場面での言語使用の資料と捉え、現代語では表現効果のために存在動詞が選択されることを指摘する。対照研究では、衣畑智秀「日本語疑問文の歴史変化」（『日本語の研究』18-1）が、中世語の疑問詞疑問文の助詞ゾの扱いが不明ながら、現代語と中・近世語の対照により、現代語の助詞カの〈―問いかけ性〉を指摘する。

文法史研究が変化の要因を言語使用の場面に求めるようになったことで、個々の用例をより精確に史的変遷上に位置づけるために、文献の社会的・文化的背景への関心が高まっている。今期、『キリシタン語学入門』（八木書店、3月）、『国語国文』91-11,12「後期中世語特輯」、日本語学会2022年度春季大会シンポジウム「文献資料を読む」等、資料研究の報告が相次いだのは、その要請に応えるものとみることもできよう。

ただ一方で、文献の社会的・文化的背景の把握以前に、現在、必要なのは現代語訳かもしれない。筆者も専門とする中世後期～近世の文献には、伝統的に現代語訳は作られてこなかった。当期の文献に多い、特定の位相・文体や文芸を想起させる表現を区別したり、同時代の読者には共有されていた社会的・文化的慣習を読み取ったりすることが、現在の文法研究者には困難なことを窺わせる例が散見された。これらは用例の解釈に直結し、読み取れないと変化の方向性も見誤ってしまう。本学会のように、文献資料の言語をまずは等しく表現と捉えて、言語の史的変化を慎重に見極める姿勢が、より重要になっていくものと思われる。一部、編者・副題を略す。　（同志社大学）